

## 第2回 ニュージーランド看護研修

ニュージーランド北部のオークランドにあるマヌカウ工科大学にて、2018年3月3日～3月11日の9日間に渡って、看護学科では2回目となる海外短期研修を実施しました。看護学科学生14名が参加し、医療英語のレッスンを受講するだけでなく、現地の病院、ホスピス、高齢者施設を訪問し、日本とは異なる医療福祉施設について学びました。また、血圧を測定する現地看護学生の実習に患者役として参加したり、歩行困難な患者さんを座位から持ち上げて楽々移動させることのできるスタンディング・ホイストを全員が体験したり、ホスピスでの追悼セレモニーに参加させて頂いたり、参加体験型の実習を実施することができました。



### 参加者のアンケートより

- 患者にとっての困りごとや問題を明らかにし、効果的なコミュニケーションをとりながら、患者の状態を常に把握しながら関わること、また患者に十分な説明を行い、常に感謝の気持ちを持つこと、など看護師が大切にすべきことは世界共通であることが分かった。
- 私が最も印象に残ったのは“コミュニケーション”をととても大切にしているということであった。現地の学生からの説明で何度も“コミュニケーション”というワードが出てきたこと、日ごろからその練習をしているということが感じられた。
- 私の考えていたホスピスは「看取りの場所」というイメージしかなかったがTotara Hospiceでは看取りは活動のほんの一部で、デイケアでの交流や教育、挙式など、苦痛緩和ではなく、患者の望みを叶えることに重きを置いているように感じた。
- 最も印象的だったのは居住者・利用者の方々がアクティブで非常にいきいきと活動していることであった。死ぬのを待って静かに過ごすという感じではなく、活発に活動しており、希望に満ちている感じがした。
- 亡くなった方をホスピスの中で“Saying Goodbye”で追悼している場面を見学したとき、深い悲しみは感じなかった。むしろ、生前の思い出を面白おかしく話し合っていて、楽しそうだった。そこからも「死」への考え方が異なるのだと感じた。
- 死に対して悲観的な考えより、残りの人生をどう楽しもうかとポジティブな考えを持っているなと感じ羨ましいと思いました。自分が看護師として働き、余命を宣告される患者さんのケアにあたったときは、ホスピスにいた人たちのようにこれからの人生も楽しめるもので、死は終わりではなく、家族や身近な人たちの心には存在し続けることを伝えられたらと思いました。
- ニュージーランドで強く感じたのは、人とのつながりをとても大切にしているということであった。これから私も人との関わりやつながりを大切に、良い看護師になれるよう努力していきたい。そしてもっといろいろな経験を重ねて自分自身のスキルアップにもつなげていこうと思う。
- 異なる母国語を使う人たちで交流することは難しいが、互いに工夫を重ねることで親しくなれることがわかった。異文化をもつ人の行動を失礼だと思うのではなく、理解しようとするのが重要だと考えた。
- 今回出合った方々に、いつか自分の仕事を、自分の生き方を自信をもって話せるように、これからもたくさん学び続けていこうと強く思った。
- 今回学んだことや体験したこと、病院見学で見たことを今後の学生生活にも生かしていきたいです。そしてNZの医療のように患者さんの生活の質が高く、幸福度の高い医療を提供できるような看護師になりたいです。
- 英語に自信のない自分でも、聞き取ろうとしたり、積極的に話しに行くことで、言葉の壁は簡単に乗り越えられるものだなと思いました。
- 研修前は、ホームステイは英語の勉強とニュージーランドの文化を学ぶためだと思っていたが、ホストファミリーと関わるうちに勉強を忘れ、ただただ仲良く会話がしたいと思うようになった。